

国語

第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ヴェブレンは「衛示的消費」^{げんじ}という言葉でファッションを読み解こうとしたが、これは「見せびらかしの消費」ともいわれている。どれだけ金銭的に恵まれているかや、どれだけ働く必要性がないかを、豪華な衣服を着たり、あるいは労働には不向きな衣服を着ることによって表明しようとしていると捉えたのだ。ヴェブレンは、そのことを女性が男性の代わりに「代行的消費」を行っていると表現した。ヴェブレンは、結婚している女性たちの「本分は家庭のうちにあり、彼女はそれを『美しくする』必要があるばかりか、彼女自身がその『主要なⅠ』でなければならぬ」(「ヴェブレン、一九九八・二〇二」)状況におかれていると指摘している。ヴェブレンの想定した構造では、見せびらかしあう競争のなかで、相手に負けないために、お互いに次々に相手より豪華な衣服に着替えていく必要が出てくる。それが、ファッションという現象を引き起こしていると考えたのだ。ヴェブレンは、ル・ボンやタルドが想定した一方向での流行の伝播^{でんぱ}ではなく、さまざまな方向で交差しあう矢印^アのウズとして、ファッションを捉えたのだ。

しかし、あらためて現実を見回してみると、単純に金銭的に恵まれていることを示すような豪華さだけを追求して、衣服が着られているわけではない。ヴェブレンが「衛示的消費」という概念を考えついた時代には、確かにどこまでも豪華さを競うような単純さは残されていたが、時代を経るにしたがって、むしろ、そういった衣服は「成金趣味」^aとして揶揄^{やゆ}され、Ⅱの対象になることも多くなっていた。そうすると今度は、「成金趣味」^bを忌避^{きひ}しつつ、それでいて相手より「おしゃれ」であることをめぐって争うようになる。そのような現象をピエール・ブルデューは、「慎みの見せびらかし」(「ブルデュー、一九九〇・三八五」という概念で説明している。つまり、ファッションという現象には、金銭を持っているという裕福さの見せびらかしだけではなく、良いものを知っているという教養の見せびらかしがあることを指摘したのだ。教養というのは、ブルデューの別の言葉でいえば「ハビトウス」^(注)や「文化資本」である。家庭や教育機関といった環境を通して身につけられた考え方、嗜好^{しこう}、行動の傾向が、視覚的な情報として表出してしまいうのがファッションだと捉えたのだ。

「教養」の蓄積には、生まれや育ち以外にも、マスメディアを通じた情報^イシユウシユウも大きく影響する。フィンケルシュタインが指摘するように、「流行とは一定の商品やサービスを使得知識を組織化すること」である。おしゃれであるという名声を勝ち取るためには、「なにが流行でなにがそうでないかについての知識の格差」(「フィンケルシュタイン、一九九八・一三八」)をうまく利用して、情報戦を勝ち抜かなければならない。外面には内面がにじみ出るのだという^ウシンギ不明の思い込みを利用し、外面を操作することによって内面をⅢしようとするのが

ファッションであろう。ファッションは、特に雑誌を中心とした出版メディアとの関係が深い。「知識」は、そういったマスメディアを介して組織化され、受け手によって組み合わせられジッセン^エされ、タクエツ化^オのための武器にされる。

ただ、知識といつても、言語によってのみ知識が形成されているわけではない。ファッションとは、物を媒介にした非言語^Bコミュニケーションのひとつでもある。精神医学者のジャーゲン・ロイシュが指摘しているように、人間の行うコミュニケーションは、「言語レベルで明白に意図的に行われるメッセージの伝達だけ」〔ベイトソン／ロイシュ、一九九五：四一五〕ではない。衣服に限らず、およそ全てのデザインされた工業生産品は、「わたしたちが外界にかかわつていくための、ひとつの根源的なメディア」〔柏木、一九九二：五〕であり、ファッションは、デザインされた物を使用することによって引き起こされるコミュニケーションの軌跡のことである。それらをどう具体的に使用するのかの知識は、写真一枚で伝えられるようなことでも、言葉を尽くしたところで説明できるとは限らない。

その実例を見せてくれるのが、若者たちの物質的な豊かさ^カのカジョウ^カさを写した都築響一だ。都築は、一九九三年に『TOKYO STYLE』、二〇〇八年に『着倒れ方丈記』という写真集を出版している。物が溢れ^{あふ}きつて混沌^{こんとん}とした部屋の数々を撮影した『TOKYO STYLE』と、ブランドに夢中になっている人たちの病的なまでにセイゼン^キとした部屋を撮影した『着倒れ方丈記』の二冊だけを比較して、何かを論じることが乱暴であるし、二冊が刊行された間の一五年に、社会全体が『TOKYO STYLE』から『着倒れ方丈記』に向かつていったわけでもないのだが、これら二冊の写真集を見ると、柏木博が指摘したように、どのようなタイプの室内であれ現代社会の人びとの室内は「私たちの存在、内面を物語る痕跡」〔柏木、二〇一三：六〕であり、「私たちの主体を現すもの」〔柏木、二〇一三：六〕であることがよくわかる。現代社会では、およそ全体を把握できないほど大量の消費財のなかから、自分らしいものを選んで所有し、自分らしく配置していくことが、常に要求されているのだ。二冊の写真集は、そのことを鋭く切り出して見せてくれる。

そして『TOKYO STYLE』にせよ『着倒れ方丈記』にせよ、その室内におかれている物の多くは衣服である。身体の上に直接着ている衣服は、室内以上に「私たちの存在、内面を物語る」ものであり、「私たちの主体を現すもの」でもある。あるいは、勝手に物語ってしまうものであり、現してしまうものでもある。

しかしだからといって、衣服から、内面を正確に読み取ったり、コミュニケーションの軌跡を解明するのは不可能である。ロラン・バルトの起こした記号論^シの潮流^シを受けて、一時期、ファッションを通じてどのような意味のメッセージが交わされているかを、具体的に解説しようとする試みが盛んになった。こういった解説は、ファッションに関する批評としても最も需要の高いものであり、実際にそういった批評が「人々を楽しませ、ファッションへの関心を高めるために行

われている」(フィンケルシュタイン、一九九八・九九)のも事実である。しかし、フィンケルシュタインが警告しているように、「衣服から特定のメッセージを読み、それをコチョウウするのは簡単なこと」であり、ほとんどの分析は、こじつけに過ぎないだろう。

ピョートル・ボガトウイリョフのように、スロヴァキアの一地方の民族衣裳いしやうを取り上げ、「それを着る人の階級、地位、職業、年令、入信している宗教」(ボガトウイリョフ、一九八一・八五)など、衣裳に織り込まれた社会的な意味を解読した人物もいる。ただ、ボガトウイリョフは、「民族衣裳には独自のトクチョウケが多くあり、都会の衣服とは何らの共通性もない」ことを強調し、「都会の衣服は、すみやかに変化してゆく流行現象に支配されている」(ボガトウイリョフ、一九八一・一二)ことを指摘している。ボガトウイリョフも述べているように、着ている人が誰であるかを語るように何世代もかけて作られた民族衣裳と違い、現代社会の衣服を通してその人の人となりや、社会的位置を知るのは難しい。

それゆえに、ファッションにおけるコミュニケーションは、言語におけるコミュニケーションとはまるで違う体系を持つていると理解したほうがいいだろう。前述の「術示的消費」をトナエたヴェブレンと同じ時代に、社会学者のゲオルク・ジンメルは、ファッションを二律背反d的な心情の顕れあらわと捉えた。ジンメルによれば、人と同じでいたいという「一様性衝動」と、人と違っていたいという「個性化衝動」(ジンメル、一九九九・五六)の矛盾した二つの衝動が、ファッションをもたらししているという。ジンメルは、ファッションを「真似まねをしたい」とか「見せびらかしたい」といった、本人の明確な動機の結果としては考えずに、あるいは、何かを伝えたいという確固たる意志の産物として捉えることもせず、着用者の心のなかの葛藤を映し出す鏡として考えた。ジンメルによつて、ファッションはより複雑で高度な心の葛藤を表出するものとして認識されるようになり、そのメッセージは簡単には解読できないと考えられるようになった。

ミハイル・バフチンが指摘しているように、「記号の形態は、まず第一に、人々の社会的組織や、人々が相互に作用しあう際の身近な条件によつて規定されている」(バフチン、一九八九・三四)ものである。衣服の意味は着ている人が所属する社会集団や、あるいは見る人が所属する社会集団によつて決定されるものであり、日々刻々と変化してしまう。ほとんどの流行の衣服には、いくら解読を試みたところで、ただ「新しい」という社会的な合意しか見つからないであろう。記号論的な読みをしても、精神分析的な読みをしても、衣服のすべてが解読されることなどないのだ。しかし、明確な意味を持たなくても、ファッションはコミュニケーションを引き起こす構造を確実に作っている。その事実は、現代社会におけるコミュニケーションが、決して言語だけで形成されているのではないことを、はっきりと指摘している。

(井上雅人「ファッションと人間解放の神話」による)

(注) ハビトウス——態度、外観、装い、様子、性質、習慣。

問1 二重傍線部ア～コのカタカナを漢字に改めよ。(楷書で記すこと。)

ア	ウズ	1
イ	シュウシュウ	2
ウ	シンギ	3
エ	ジッセン	4
オ	タクエツ	5
カ	カジョウ	6
キ	セイゼン	7
ク	コチヨウ	8
ケ	トクチヨウ	9
コ	トナえた	10

問2 傍線部a～dの漢字の読みをひらがなで記せ。

a	成金	11
b	忌避	12
c	潮流	13
d	背反	14

問3 空欄Ⅰ～Ⅲに入る語として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

Ⅰ	15	①	ライバル	②	装飾品	③	デザイナー	④	付属物	⑤	パトロン
Ⅱ	16	①	憧憬	②	嫉妬	③	珍重	④	侮蔑	⑤	確執
Ⅲ	17	①	明示	②	糊塗 こと	③	改変	④	隠蔽	⑤	示唆

問4

傍線部A「見せびらかしの消費」とあるが、筆者はその捉え方をめぐってどのように考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

18

① 衡示的消費の時代には、ファッションは自分がいかに働く必要がないかを示すという行き過ぎた考えが存在したが、その後ファッションはおしゃれセンスがにじみ出るものだという慎重深い考え方へと進化していった。

② 見せびらかしの消費は、裕福さを競うものから教養を競うものへと変化はしたが、いずれも、競争相手に見せつけるという面と、おのずとそれらがにじみ出るという面とが併存していた。

③ ファッションはある種の見せびらかしであるという捉え方には妥当性があるが、何をどのように表出するのかは時代によって変化するし、またそれを追求する動機は単純なものではない。

④ 人間はいつの時代も自分をよく見せようとするものであり、また内面はおのずと外へとにじみ出るものなので、ファッションがある種の見せびらかしであるという考えは正しい捉え方である。

⑤ 見せびらかしの消費は確かに存在するが、それが金銭的な裕福さの見せびらかしなのか、教養の見せびらかしなのかは、解釈の違いや変化に過ぎず、現実のファッションそのものの変化ではない。

問5

傍線部B「非言語コミュニケーションのひとつでもある」とあるが、ここにおける筆者の考えを説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

19

① おしゃれのためには知識の蓄積が必要であるが、知識は言葉だけではなく、衣服をはじめとするデザインされた生産物はすべてメッセージ伝達の機能を有しており、その意味でファッションは人間の内面を正確に読み取れるものとなっている。

② 衣服から特定のメッセージを読み取るのは簡単なことではないが、衣服は写真などとともに、時には言葉以上に多くのものを語ることができ、いわば私たちの存在や内面を物語る痕跡、ひいては私たちの存在そのものであることは間違いない。

③ ファッションは、その人の内面を表すものであり、そのつもりはなくても勝手に主体を物語ってしまうという意味で、コミュニケーションの一手段であり、私たちはそれを分析し他者を理解することを、社会から常に求められている。

④ ファッションは、私たちが外界とかわるためのメディアであり、私たちのコミュニケーションの軌跡であり、また、その軌跡を解読する試みも行われているが、それは不可能であり、ファッションへの関心を高めることにも結び付かない。

⑤ 人間は、言語による意図的なコミュニケーションだけではなく、衣服のようなデザインされた工業生産品によってもコミュニケーションを行っており、ファッションは本人が意図しない部分も含めて、私たちの内面を表すものとなっている。

問6

傍線部C「心のなかの葛藤を映し出す鏡」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

20

① ファッションは、社会集団によって規定された一様性と、明確な個人の意志としての個性化の衝動の矛盾が反映された、複雑なものだということ。

② ファッションは、常に社会的組織によって規定された中で、何とか人と違うものを表出しようとする矛盾した心を映し出したものだということ。

③ ファッションは、常に民族衣裳のような一様性と、すみやかに変化する流行に見る個性化が絡まり合った状態を映し出したものだということ。

④ ファッションは、言語によるコミュニケーションとは全く違い、明確な動機によるものではない複雑な要素が絡み合った心情の表れであるということ。

⑤ ファッションは、みんなと同じでありたいという思いと、そこから抜け出したいという複雑な思いを表したいという意志の表れであるということ。

問7 本文中にはファッションをめぐる様々な学説が紹介されている。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 21

- ① 様々な学説を、論の展開に沿って適切に配置・紹介していくことで、論を深め、ファッションの実相を明らかにし、その本質に迫ろうとしている。
- ② 多くの学説を、先入観を排して並列的に紹介し、それらを比較検討することで、より優れた説を取り入れ、筆者の目指す結論へと導いている。

- ③ ファッションの持つ様々な特質のそれぞれについて、対立する考え方を紹介し、その比較を通して問題点を明らかにすることで論を深めている。

- ④ 様々な学説を、現実のファッションにあてはめて考察することで、妥当な論と、現代にはすぐわない論とを峻別し、ファッションの本質に迫っている。

- ⑤ 一つ一つの学説と向き合い、丁寧に分析することで、それぞれの説の欠点や限界を明らかにし、その積み重ねによって独自の結論に導いている。

問8 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 22

- ① 都築響一の二冊の写真集は、部屋や衣服という「モノ」が、私たちの存在や内面を物語ることを如実に示しており、同時にそこに時代の変化も見えて取れる。

- ② ファッションにはただ「新しい」という合意しか見いだせないものであり、したがってファッションを通してコミュニケーションを論じることには意味がない。

- ③ 流行とは商品やサービスを使った知識の組織化であり、知識の格差なので、雑誌やメディアに惑わされずにどのように知識を組織化するかが問われている。

- ④ ヴェブレンのとなえた衛生的消費は、流行をうずと捉えたところに新しさがあつたが、女性を男性の代行と捉えたところに、その時代特有の欠点があつた。

- ⑤ ファッションの発するメッセージの解読は、ほとんどこじつけに過ぎないが、それはファッションがコミュニケーションであることを否定するものではない。

第2問

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

朝比奈^{あさひな}といひし老人^aの、常の言葉に、神仏を誓ひて物言ふありけり。父にておはします人の仰せられしは、「世の常に、いつはり多き人は、その言葉を信にせんとて、神仏に誓ひて言ふ事あり。この人は常の行ひに、いつはりある人にはあらねど、天性かろがるしき人の、言葉の慎みなくて、神仏に誓ひて物言ふ事のくせになりたるなり^b。汝等^{なな}もよく心すべき事なり」と戒め給ひき^{たま}。

父にておはせし人の友に、関といひし人は、年は五つも六つも少なりしと聞こえしが、その七十に余りぬる頃より、物言ふ事も、なし行ふ事も、^(注)耄^{まう}せられしとみえし事多かりけるを見給ひて、「およそは、人の氣力は齡^{とし}と共に衰へぬるものなれば、耄^{まう}すべき期^ア至りぬれば、いかに慎み思ふ心ありとも、耄^{まう}せざる事を得べからず。されば、若くさかりなる時より、その心得したらむには、たとひ耄^{まう}期に至りぬるとも、うち見る人のあさましと思ふほどの事はあるまじきものにや^e。老いたる人の耄^{まう}せしと見ゆる事は、言ふまじき事をも言ひ、なすまじき事をもなす。これをすぶるに、ただよく物を忘れぬるによるなり。若きも老いたるも、その行ひの常ありて、凡^{おほ}の事ども事すくなきにはしかず。事多ければ、あるいはなし、あるいは止む事ありて、おのづから常なりがたし。されば、我若かりしより、常になし行ふ事ども事多からずして、そのなし行ふ事ども力の及ぶ限りは、みづから事をとりて、召し使ふ者どもに、うち任せし事もあらず。常の調度をも、置くべき所を定めて、かしこここに移し置く事あらねば、夜ふけ灯消えし時といへども、
X 事なくしてこれを得つ。たとへば、目の見^g、耳の聞き、手の取り、足の行く事の、我が思ふ所に应じぬるがごとくなるは、その事と物と、ことごとく皆我と共に常に習ひ熟しぬるが故なるべし。また老いたる人には、ふるき事ども尋ね問ふに、その益^イある事もあるなり。幼き時に習ひし事の、年たけぬれど、忘れがたき事のごとくに、若かりし時の事は、年老いぬれど、なほ心に止まりぬる事もあるれば、それらの事は、問ふ人あらむ時に、答へもせむはあしからじ。世の中の新しく、めづらしき事どもは、耳には聞きぬとも、口よりは出すべからず。すべて、初めて聞きし人の名などは忘るる事もあり。その事ありし地の名、または月日などは、少しく程を隔てぬれば、忘るる事もある事なれど、若き人の忘れしは、ただその時に当たりて忘れし、とのみ聞く人も思ふなり。年老いぬるが定かならぬ事とも言ふをば、耄^{まう}しにけりところおもふものなれ。人の年老いぬるに従ひて、よろづの事につきて、若くさかりなりし時よりは、その慎^Eみなほ重かるべき事なり。この人は、天性正直なところのありて、才略も世の常ならぬ所おはしけれど、若かりし時より、物言ひも、なし行ふ事も、Y 所にのみ任せて、慎めるところ少なりしが、はたして今はかくおはするなり」と仰せられき。

(『折たく柴の記』による)

老せ——年を取つて愚かになる。
 ずぶる——まとめる。

問1 傍線部ア・イの古語の読みを、現代仮名遣いのひらがなで記せ。

23

24

問2 波線部あ・いの語句の本文中での意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうち

からそれぞれ一つずつ選べ。

あ
あさまし

25

①
さ
も
し
い

②
みすぼらしい

③ 情けない

④ つまらない

⑤ 珍しい

いはたして

26

① 案の定

② しだいに

③ とりもおさず

④ はなはだ

⑤ 本當に

問3 二重傍線部 **a・f・g・h・i** の格助詞「の」の用法の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

27

27

①
a
連体

f
同格

g
主格

h 連体修飾格

i
主格

②
a
主格

f
同格

g
比喻

h 主格

i
連体修飾格

③
a
主格

f
同格

g
主格

h 連体修飾格

i
主格

④
a
同格

f
主格

g
比喻

h 連体修飾格

i
主格

⑤
a
同格

f
主格

g
主格

h 主格

i
連体修飾格

問4 二重傍線部**b・c**の「なり」の文法的説明の組み合わせとして最も適当なものを、次の

①～⑤のうちから一つ選べ。 28

- | | | | | |
|---|----------|------------------------------|----------|----------------|
| ① | b | 動詞「 <small>な</small> 業る」の連用形 | c | 断定の助動詞「なり」の終止形 |
| ② | b | 動詞「成る」の連用形 | c | 断定の助動詞「なり」の終止形 |
| ③ | b | 動詞「慣る」の連用形 | c | 伝聞の助動詞「なり」の終止形 |
| ④ | b | 断定の助動詞「なり」の連体形 | c | 伝聞の助動詞「なり」の終止形 |
| ⑤ | b | 断定の助動詞「なり」の連体形 | c | 推量の助動詞「なり」の終止形 |

問5 二重傍線部**d**「られ」・**j**「おはする」の敬語は、誰から誰に対する敬意を表しているか。

その組み合わせとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 29

- | | | | | |
|---|----------|----------|----------|----------|
| ① | d | 作者が父に対して | j | 父が関に対して |
| ② | d | 作者が関に対して | j | 作者が関に対して |
| ③ | d | 父が関に対して | j | 作者が関に対して |
| ④ | d | 作者が関に対して | j | 父が関に対して |
| ⑤ | d | 父が作者に対して | j | 作者が父に対して |

問6 二重傍線部**e**「あるまじきものにや」の文法的説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 30

- | | | |
|---|---------------------------------|------------------------------|
| ① | ラ行下二段活用動詞「生 <small>あ</small> る」 | 終止形＋打消推量の助動詞＋名詞＋格助詞＋疑問の係助詞 |
| ② | ラ行下二段活用動詞「生 <small>あ</small> る」 | 終止形＋不可能の助動詞＋名詞＋断定の助動詞＋反語の係助詞 |

- | | | |
|---|--------------|---------------------------|
| ③ | ラ行四段活用動詞「ある」 | 終止形＋不適當の助動詞＋名詞＋格助詞＋反語の係助詞 |
|---|--------------|---------------------------|

- | | | |
|---|--------------|-------------------------------|
| ④ | ラ行変格活用動詞「あり」 | 連体形＋打消推量の助動詞＋名詞＋断定の助動詞＋疑問の係助詞 |
|---|--------------|-------------------------------|

- | | | |
|---|--------------|----------------------------|
| ⑤ | ラ行変格活用動詞「あり」 | 連体形＋打消推量の助動詞＋名詞＋格助詞＋反語の係助詞 |
|---|--------------|----------------------------|

問7 空欄X・Yに入る言葉として最も適當なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

X 31

- ① 眺め明かす
- ② 尋ね求むる
- ③ きめ付くる
- ④ 聞き覚ゆる
- ⑤ おもひ出づる

Y 32

- ① 汝のおもふ
- ② 汝のすすむる
- ③ 我が思ふ
- ④ 我がねんずる
- ⑤ 人のすすむる

問8 傍線部A「若きも老いたるも、その行ひの常ありて、凡の事ども事すくなきにはしかず」とあるが、若い人にも老いた人にも、どんなことが大切であると述べているのか。最も適當なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 33

- ① 行いが、いつも一貫していて、少なめであること。
- ② 行いが、日常茶飯事のこと、簡略であること。
- ③ 行いが、普通のこと、むだがないこと。
- ④ 行いが、つましくて、欲が深くないこと。
- ⑤ 行いが、世間の人と変わらず、出しゃばらないこと。

問9 傍線部B「事多ければ、あるいはなし、あるいは止む事ありて」の解釈として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 34

- ① することが多すぎると、する気が失せたり、途中で嫌になったりすることがあつて
- ② したいことが多いと、初めから手につかないことや、途中やめになることがあつて
- ③ することの範囲が広いと、興味がわいたり、興味がなくなったりすることがあつて
- ④ 雑事が多いと、好んでしたり、忘れたまましなかったりすることがあつて
- ⑤ することが多いと、成し遂げたり、途中やめになったりすることがあつて

問10 傍線部C「問ふ人あらむ時に、答へもせむはあしからじ」とあるが、なぜこのように述べているのか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 35

- ① 若い時から念を入れて習ってきたことの中には、人に利益をもたらすようなことが多くあると考えるから。
- ② 若い時から老いるまでにしてきたことは、年をとってもぼけないための貴重な体験であると考えから。
- ③ 若い時に習得したことは年老いてからも正確に覚えていて、若い人の知らないことが多くあると考えるから。
- ④ 若い時に習って年とってからでも忘れずに覚えている古いことの中には、有益なことがあると考えから。
- ⑤ 若い時に日常の生活で繰り返し返して身につけた習慣は、老いても間違えることなく覚えていると考えるから。

問11 傍線部D「若き人の忘れしは」とあるが、この文章で、若い人と老いている人との物忘れに対して、人はどのように思っていると述べているか。その違いの説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 36

① 若い人は自分の物忘れを自覚しているが、老いている人は自分の物忘れを自覚していないと、人は思っている。

② 若い人は覚えていたくないことを物忘れし、老いている人は覚えていたのに物忘れすると、人は思っている。

③ 若い人は自分に不都合なことを物忘れの振りをして、老いている人は本当に物忘れをしていると、人は思っている。

④ 若い人はほんの少し物忘れをする程度で、老いている人はほとんど物忘れをすると、人は思っている。

⑤ 若い人は何かの折にたまたま物忘れをして、老いている人はぼけたから物忘れをすると、人は思っている。

問12 傍線部E「その慎み」とは、どのようなことか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 37

① 年をとると、人に対して言ったり行ったりしたことを忘れるので、人と付き合う時には口数を減らすようにすること。

② 年をとってから新しく聞いたことなどは、とかく忘れやすいので、そのことを口に出さないようにすること。

③ 年をとると言動に間違いが多くなるので、人から間違いを指摘された時には、腹を立てずに謙虚に謝るようにすること。

④ 年をとってぼけていると思われないためには、ぼけていることを自覚して、できるだけ人との接触を避けるようにすること。

⑤ 年をとってから他人に信用されるためには、自分の言動を控えるだけではなく、相手の言動に耳を傾けるようにすること。

問13 傍線部F「かく」とは、どのようなことか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一

つ選べ。 38

① 若い時から言動に慎みがなかったので、年をとってからますます差し出がましくなったこと。

② 若い時から才知が非凡であったので、老いても勝手気ままな性格が直っていないこと。

③ 年をとってから気の赴くまま自由奔放に行動する傾向が、いつそう強くなってきたこと。

④ 年をとってぼけていることに気が付かず、何でも話しかけて相手に迷惑をかけていること。

⑤ 年をとってから物忘れがひどくなり、言うことやすることにぼけたことが多くなったこと。

問14 この文章で、父が作者に伝えたいことはどのようなことか。適当でないものを、次の①～

⑤のうちから一つ選べ。 39

① 嘘の多い人は、自分の言うことを人に信じさせようとして、神仏に誓ってという言葉を使うことがあるので、相手の言うことをよく聞き分けて注意することが大切である。

② 人間の気力は年とともに衰えていくものだから、若い時から行うことを少なくして、できる限り自分で行い、困っている人には知恵を授けて助けることが大切である。

③ 人は年とともにぼけていくものなので、若い時から自分の言うことやすることを控えめにして、老いてからは新しいことや珍しいことを聞いても口に出さないことが大切である。

④ 人は気を付けていてもぼけていくので、できるかぎり若い時から自分のことは自分でして、身の回りの物などの置き場所も決めておくように、習慣づけることが大切である。

⑤ 人は自分の性格が正直で才知に優れていても、年とともにぼけていくので、思いのままにふるまうのではなく、言うことやすることを慎むようにすることが大切である。

(国語の問題は終わり)